学長告辞（平成 25 年度入学式）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。全学の教職員と在学生を代表して、心から皆さんを歓迎いたします。とくに、東日本大震災での被災を乗り越えて入学してこられた諸君には、その心の強さに対して、特別の連帯の意を表したいと思います。別室で映像配信によってご覧いただいているご家族の皆様も、さぞかしお慶びのことと存じます。

学習院は、幼稚園から大学院までを擁する総合学園です。ここに、その学習院全体を代表する波多野学習院長、卒業生全体の同窓会である桜友会の内藤会長、また全体の父母会代表をはじめ来賓各位のご臨席を賜る中で、滞りなく入学式を執り行えますことを、学長として、たいへんうれしく思っております。

この式には、大学院への入学者もおられるはずですが、ほとんどは学部一年生です。その皆さんにとって大学は、小学校や幼稚園から始まった学校教育の最終段階にあたります。しかし、学ぶという人の営みは、学校の中に限られているわけではありません。人生全体を通じて、人とかかわり、ものごととかかわる中で、不断に求められる力が、みずから自身で積極的に学び取っていく力です。現在は日本だけでなく世界全体が、見通しすら困難なほど、大きく変動しつつあります。そうした時代を生きて、解決が容易でない課題にも逃げずに立ち向かうためには、まず皆さん自身が大学において、しっかりと生活を組み立て、皆さん自身のなかにある力に気づき、それらを引き出し磨いていく、そういう充実したキャンパスライフを送る必要があります。キャンパスという舞台の主役は皆さんです。われわれ教職員は、いわば舞台を用意し、動かす存在といってよいでしょう。

学習院は、歴史的にその源まで遡りますと、明治維新を越えて幕末に至ります。ご承知のように、日本にとって幕末維新期は大きな変動期でした。変動期に誕生した学習院は、明治から大正を経て昭和前期にあっては、宮内省が管轄する官立学校でした。戦後に、今一度日本は激動を経験しますが、その時期に占領軍のもとで、じつは学習院は閉鎖の危機を経験しました。しかし当時の関係者の努力によって、完全に民営化する形で、私立の学校として再生します。そのとき鍵になった一つの要素は、旧制の学習院における教育が、バランスの取れた、学生たちの主体性を重んじる近代教育を実践していた、という点でした。旧制の学習院が、幕末以来の近代日本の歴史と重なり、それをリードする存在であったとすれば、戦後の厳しい状況のもとで新たにスタートした学習院大学は、戦後日本の復興と発展の歴史と重なっています。

学問研究の面でも社会的活動の面でも一線を走っている教員が実践している、落ち着いた雰囲気の中でのバランスの取れた教育、学生の自立を重んじて、フェイス・トゥ・フェイスの人間関係を重視した教育、という教育体制は、今日まで本学が一貫して保持してきたものです。これは、かつてからの長い歴史と伝統に裏打ちされたものだといってよいように思います。しかし、優れた伝統は、絶えず己のあり方を検証して、新たな時代の要請

の中で改革しつつ引き継いでこそ維持できる、という点を忘れてはなりません。皆さん一人ひとりが、その継承の担い手だ、ということを忘れないでください。

皆さんが舞台の主役だと、先ほど申し上げました。そうは言っても、皆さんはまさに大学の門をくぐったばかりですから、期待や不安の入り混じった思いを持っておられることと思います。当然です。先週からすでに各種のガイダンスがあり、部活への入部を誘いかける在学生からの、にぎやかなアプローチに、びっくりした方々も少なくないかと思います。明日からは授業の開始です。はじめのうちは、かなり慌しく時間に追われる感覚があるかもしれません。スタートは肝心ですから、大学の仕組みをしっかり理解して、充実したキャンパスライフへの第一歩を踏み出してください。

大学での新たな生活は、高等学校までとはかなり違っています。それだけに、より一層スタートは肝心です。開始に当たって皆さん自身でよく理解して、どこまで自覚的に自分たちの生活リズムを築き、行動を計画するかによって、4 年間の貴重な時間を費やした成果も変わってきます。毎年立派に卒業していく学生たちの姿は、うれしいものですが、しかし、彼らが卒業のころに残す感想の少なからずが、４年の歳月が経つのは速かった、貴重な時間をもっと有効に使えばよかった、といった類のものであるのも現実です。

大学生活では、これまでになかったような、そしておそらく今後の人生でもなかなか手にできないような、自由に時間を工夫できる幅が皆さんにはあります。いかに意味あるように組み立てられるか、それは、主役である皆さん自身にかかっています。通常の授業以外に、大学が用意している留学や短期語学研修をはじめとした各種のプログラムは、多くあります。部活動を含めて、多様な活動の場を、最大限活用なさるよう願っています。

日本をはじめ、いわゆる「先進諸国」においては、いまや同世代における大学進学率は５割をはるかに超えています。そのなかで日本は、じつはその率は低いほうになっています。多くの若者が高等教育に接することは、知識基盤社会へと移行しつつある現代にあって、もちろん悪いことであるはずはありません。しかし、これが当たり前だと思ったら、すこし認識が足りません。世界に目を開けば、大学に行くどころか、小学校にすら満足に行けない、あるいは小学校しか行けない、といった子供の数がまだ少なくないこと、また、戦火や迫害を逃れて難民となり、学校どころか生きること自体が難しい若者も少なくないことは、皆さんも知っておかなければならないことです。

私ども一人ひとりの小さな個人にとって、できることに限界があるのは現実です。しかし、しばらく前にノーベル平和賞を受賞した「国境なき医師団」といった大型の国際的 NPO も、その最初の一歩は、フランスの少数の医師たちのボランティアな連携から出発したものでした。皆さんの先輩にあたる本学の卒業生の中には、国連の難民高等弁務官事務所に所属して、アフリカなどに派遣されて活躍している方たちもいます。もちろん皆さんに、紛争地にじかに行ってご覧なさいなどといっているのではありません。むしろ個々人の危機管理能力も、独り立ちするに当たっては、必要なものです。とにかくまず、世界の現実

を、さまざまな回路を通じてキャッチしてほしいのです。そのためには、英語をはじめとした外国語能力は大切です。そして、問題を自分たち自身の頭で考え、自らにできることに挑戦してみる、あるいは行動に移してみる、ということです。積極的に国内外のボランティア活動に参加している、元気な在学生の諸君も本学には少なからずいます。学長としてたいへんうれしく、また誇らしく思っています。

情報技術に代表されるような、科学技術の急速な発展のもとに、世界の結びつきは否応なしに強まっています。今後はさらに加速していくでしょう。そこからは、大きな可能性と同時に、格差をはじめさまざまなクリアすべき課題も生じているのが現実です。大学での学びを通して皆さん自身で、自分たちが生きている世界の現実をつかんでほしいと思います。課題の多くは、いままでの手法ではなかなか解決困難なもののはずです。

教室での座学だけが勉強ではありません。パソコンやスマホの画面を通じて得ることのできる情報だけが、考え判断する材料ではありません。多角的なものの見方をしてみる、さまざまな角度から自分なりにことがらをとらえてみる、そういう練習をさまざまな場でしてみてほしいと思います。できるだけ直接、人と接し、ものごとと接し、動物や植物といった命あるものと接し、本物に触れてください。間接的な情報が氾濫すればするほど、じつは直接的なコミュニケーションが重要になってきています。友達づきあいでも、部活動での経験でも、得るところは大きいものがあります。チャンスは、皆さんの前にいっぱいあります。それらを逃さず、充実した学生生活を送り、人として大きくなってください。

学部への入学生であれば 4 年後に、大学院への入学生であればそれぞれの年限ののちに、皆さんが光り輝いて、この場から巣立っていかれることを、心から期待しています。

以上をもって学長告辞とします。

平成 25 年 4 月 8 日　学習院大学　学長　福井憲彦